

ジンチェンコにもブロードベントにも言える問題は（バートレットについては定かでない。Edwards & Middleton, 1986 参照）、本質的に超個人的な現象に対する説明を、個人の頭のなかに探し求めようとしていることである。飛行は孤独な仕事のようにみえるが、実は典型的に、（特に、パイロットと地上管制官との）相互交渉や分業という精緻な「インフラストラクチャー（基礎構造）」をもつ活動である。尋常でない行為の遂行も予期せぬ失敗も、このような角度からみれば実りある分析ができるだろう。ジンチェンコの非時間的な主体もまた、こうした方法で肉体と血をもった生身の人間になるだろう。

人間の機能 (human functioning) のレベルの問題は、ヴィゴツキーの共同研究者であり弟子でもあった A・N・レオンチェフによって、理論的に研究された。

集団のメンバーが労働活動をするとき、彼はそれを行うことで、自分の欲求を充足させてもいる。たとえば、原始的な共同狩猟に参加している勢子「獲物を狩り出して追い立てる人」の活動は、食物への欲求や捕らえた動物の毛皮で作った衣服への欲求にもとづくものだっただろう。しかし、彼の活動は、直接には何を目指していたのだろうか。たとえば彼の活動は、動物の群れを驚かせて追い立て、それを待ち伏せしている他の狩人の所へ向かわせようとするものだっただろう。正確にいえば、それこそが、彼の活動の結果であるはずのことであり、それでその参加者の活動は終わる。残りは、この狩りに参加している他者によってなされる。結果——獣を驚かしたことなど——それ自体は本来、食物や毛皮などに対する勢子の欲求を満たすものではないし、その可能性もないだろうということは明らかである。し

たがって、彼の活動の過程が向けられていることと、その過程へと駆り立てていたこと、つまりその活動の動機とは一致していない。両者は、ここでは互いに引き離されている。対象と動機が一致していないような過程を、私たちは「行為」と呼ぶことにする。たとえば、勢子の活動は狩りであり、獲物を驚かすことは勢子の行為である、ということが出来る。(Leont'ev, 1981, p. 210)

(…)この場合、何がこの活動の直接的な結果 (result) とその最終的な成果 (outcome) とを結びつけるのだろうか。明らかに、個人と集団の他のメンバーとの関係に他ならない。この関係のおかげで、彼は、獲物の取り分——共同労働活動の産物の一部——を手に入れることができるのだ。この関係、この連関は、他の人々の活動を通じて実現される。それはつまり、個々人の活動の個々の構造の客観的基礎を構成しているのは他の人々の活動だということであるし、また、歴史的に——つまり、発生を通じて——、動機と行為の対象との連関は、自然の連関や関係を反映しているのではなく、社会の客観的な連関や関係を反映しているのだということでもある。(Leont'ev, 1981, p. 212)

原著は1947年に出版されたのだが、このくだりは、個人のツール媒介的行為を心理学的な分析単位とすることの不十分さを論証している。全体としての集団的活動を考慮しないならば、個人としての勢子の行為は、「無意味で正当化されない」(Leont'ev, 1981, p. 213) ようにみえる。あらゆる人間活動の母形態である人間の労働は、そもそも最初から協働的である。私たちは個人一般の活動 (the activity of the individual) については語ることが出来るが、個人個人の活動 (individual

activity) について語ることはできない。ただ行為のみが個人的なのである。

さらにいえば、ある活動と他の活動を区別するのは、その対象である。レオンチェフによれば、活動の対象こそが、活動の真の動機である。こうして、活動の概念は、必然的に動機概念と結びつけられる。労働が分業される条件下では、人は、活動の対象や動機を十分意識することがほとんどないままに、活動に参加している。人が活動をコントロールする代わりに、全体的な活動が人をコントロールしているようにみえる。

活動は、意識的な目的に従属した目標指向的な行為によって実現される。目標指向的な行為は、技能や遂行——運動的であれ精神的であれ——を扱う認知心理学の典型的な対象である。

しかし、人間の実践は、たんに行為の系列や総和ではない。言いかえれば、「活動は、ひとまとまりの単位であって、加算的単位ではない」(Leont'ev, 1978, p. 50)。

したがって、行為は活動構造のなかに含まれている特殊な「単位」ではない。人間の活動は、行為あるいは行為の連鎖という形式でしか存在しえない。(Leont'ev, 1978, p. 64)

他方で、ひとつの同じ行為が多様な活動を実現したり、ある活動から他の活動へ転移したりすることもある。また、ひとつの動機が、多様な目標と行為のなかにはつきりと現れることもある。

最後に、行為は多様な具体的状況において実行される。行為が実行される方法は、操作と呼ばれる。行為は意識的な目標に関係づけられ、操作は、条件——それが意識的に反映されることは少ない——

に関係づけられる。ツールは、結晶化した操作である。

こうして、人間の生活を形成する全体的な活動の流れのなかで、心的反映に媒介された高次な現れとして、分析がなされ、まず個々の（独自の）活動が、それらを引き起こしている動機の基準にしたがって取り出される。次に、行為——つまり、意識的目標に従属した過程——が取り出される。最後は操作である。これは、目的を達成する際に与えられる条件に直接依存している。(Leont'ev, 1978, pp. 66-67)

先にあげた狩りの例は、分業の帰結としての活動から行為への発展をよく示している。レオンチェフの研究についての解釈のなかでは無視されることが多いのだが、これとは反対方向の発展もある。つまり、行為から活動への発展である。

こうした例は、人がある動機の影響下で何らかの行為を遂行しようとしたが、動機が目標 (object) に置き換えられてしまい、行為をそれ自身のために行うことになるという、よくある例である。この場合には、行為が活動に変換されたことになる。(Leont'ev, 1981, p. 238)

病理学的なケースでは、いくつかの別々の行為が、ひとりの個人の生活全体の意味や動機になることがある。それは飲酒のこともあれば説法のこともある (Leont'ev, 1978, pp. 112-113 参照)。このことが意味しているのは、課題あるいは行為（その対象も含む）それ自体が客観的に変換されるのでは

ない、ということである。それらは抗しがたい幻惑的な重要さを与えられ、しばしば繰り返し増大していく。これが、ユングの「インフレーション」概念の中核である。

他方、拡張の場合は、行為それ自体が客観的に変換される。

そうした起源をもつ活動の動機は、意識的な動機である。しかしながら、動機は自ずから自動的に、意識的になるわけではない。そこには、ある特殊な活動、何らかの特殊な作用が必要である。これは、所与の具体的な活動の動機と、より広い活動——所与の具体的な活動を含む、より広い一般的な生活関係 (life relation) を実現する活動——の動機との関係を省みるという作用である。(Leont'ev, 1981, p. 238)

レオンチェフは、この一節で、「特殊な活動」の必然性を指摘しつつ、実は、学習活動、つまり拡張による学習の概念の心理学的核心を予見している。この点については、後で具体的に論証していきたいと思う。

レオンチェフにとって、活動とは、たえまない内的運動のなかでつくられるシステムの形成体である。

この過程で人間は、直接的・感性的反射の枠を超えて、これらの対象を認識する。「主体・対象」の直接的な働きかけでは、対象の性質は主体が感じることできる種類と鋭敏さの程度の条件の範囲でのみ

知られるが、道具に媒介された相互的な働きかけ合いの過程では、主体の認識はこの枠を超えるのである。たとえば、ある材質の対象を他の材質でできている対象によって機械的に研磨する場合、人は、皮膚・筋肉感覚器官ではまったく覚知できないほどの正確さでこれらの対象の相対的な硬さを知ることができる。一方の対象についてのキズを見て、他方の対象の方がより硬い、と結論すればよいのである。この意味で、道具は最初の真の抽象である。(Leont'ev, 1978, p. 23)

活動のなかで初めて対象は、主観的な形をとる、つまりイメージに移行する。それと同時に、活動のなかで活動はその客観的結果、産物に移行する。このように見るならば、活動は「主体-対象」という両極のあいだの相互的移行を実現する過程のことである。(Leont'ev, 1978, p. 50)

ハンス・ヨアス (Joas, 1980)、クラウス・オットーマイヤー (Ottomeyer, 1980) をはじめ何人かの相互主義者たちは、レオンチェフやその弟子を、活動の道具生産的側面を一面的に強調して社会的・コミュニケーション的側面を無視していると批判している。右の引用は一見、この批判を支持するもののようにみえる。

しかし、公平な読み方をすれば、もっと見識ある見方がえられる。

他の条件（道具的条件に加えて——引用者）とは、個人と対象世界との関係が、個人と人々との関係によって媒介されるべきだということであり、また、この関係が交渉過程のなかに含まれるべきだとい

うことである。この条件は常に存在する。というのは、対象世界とまったく孤立して交わる個人・子どもという観念は、完全に人工的な抽象にすぎないからである。

人、子どもは、単純に人間世界に投げ込まれるのではない。周りの人々によってこの世に招かれ、そして彼らによって案内されるのである。(Leont'ev, 1981, p. 135)

人間は、他の人々との関係を通じてのみ、自然そのものとかかわりをもつ。それは、労働がまさにその最初から、(広義の) ツールに媒介され、同時に社会的に媒介された過程として現れるということ在意味している。(Leont'ev, 1981, p. 208)

また、レオンチェフの弟子メシユチエリヤコフは、この分析単位を「共有された対象活動⁽²⁾」と呼んでくる (Meshcheryakov, 1979, p. 294)。

一種の悪循環が展開される。ツールを使ってどう働きかけるかを知るためには、子どもはツールのことを知っていなければならないし、逆に、ツールのことを知るためにはツールを使って働きかけることが不可欠である。だが、この悪循環は、大人が、ツールを使って働きかけることを子どもに教えるようになるとき破られる。この教授・学習は、大人と子どものあいだで共有された共同の対象的行為のかたちでのみ可能になる。(Meshcheryakov, 1979, p. 296)

問題は、活動の道具的側面とコミュニケーション的側面が、レオンチェフの手になる統一された複合的モデルのなかに組み込まれていないことである。レオンチェフの研究においては、ヴィゴツキーの道具的行為 (instrumental act) のモデル (図2・3) に取って代わるような図式的モデルが示されることはなかった。

レオンチェフの研究では、活動の二つの側面がこのように不完全にしか統一されなかった。そのため、個人の生活過程の二領域として活動とコミュニケーションの分離を試みる余地をロモフ (Lomov, 1980) に与えることになった。ロモフによれば、活動は主体-対象関係として理解されるべきであり、一方、コミュニケーションは主体-主体関係からなる。この二重の概念把握は、A・N・レオンチェフの息子、A・A・レオンチェフによって厳しく批判された。彼の言うところによると、活動は個人的なものとして正当に特徴づけることはできない。むしろ、そのあらゆる構成要素において活動は社会的なのである (Leontjew, 1980, p. 527)。

したがって、共同活動を扱っているときには、集団的な主体、あるいはこの活動の全体的な主体について語ることができる。集団的な主体と「個々の」主体との相互関係は、共同活動の構造についての心理学的分析を通じてのみ理解できるのである。(Leontjew, 1980, p. 530)

こうして、A・A・レオンチェフにとつてのコミュニケーションは、あらゆる活動にみられる統合的側面なのである。他方、コミュニケーションは、それ自身特殊化された活動システムへ分化する。

そのことは、たとえば、さまざまな形態のマス・コミュニケーションをみれば明らかだろう。しかしこの場合でも、活動の基本的要素のすべて（その内部にある内的コミュニケーションの側面を含む）が保持されている。

A・A・レオンチェフの指摘は、十分うなずける。しかし彼も、より適切なかたちで統一的活动モデルをつくりだすには至っていない。言いかえれば、活動の本質的要素と内的関係が、レオンチェフ親子によって包括的に分析されモデル化されることはなかった。

近年再び、ソビエト心理学の議論のなかで、この問題がとりあげられている。ラジホフスキー (Radzhovskii, 1984) である。

この (A・N・レオンチェフの——引用者) 形態学的パラダイムは、活動が、他の人々の存在——實際上であれ想像上であれ——の結果、変化するのはなぜなのかをあまりうまく説明してくれない。それはまた、「他者」と他の物理的なモノとの違いが、心理学的観点から見るとどこにあるのかという問題——たとえば、コミュニケーションや相互交渉といった問題——にも答えてくれない。(…) 活動の動機と手段の社会的性格が個々の活動の特殊な構造のなかに反映されることは決してない。この社会的性格は、この構造に不変である (…)。 (Radzhovskii, 1984, p. 37)

ラジホフスキーのもっとも重要な議論は、「活動の発生それ自体は解明されていない。すなわち、活動の構造 (…) が展開していく出発点となる構造的・発生的な原初的単位が示されていない」

(Radzikhovskii, 1984, p. 40) ということである。彼は、対案となる分析単位として「社会的行為」もしくは「共同行為」を提案している。

私たちが言おうとしていることは、具体的にいえば、個体発生的にみて第一の共同活動（より正確に言えば、第一の共同行為）の一般的構造には、少なくとも次のような要素が含まれているということである。すなわち、主体（子ども）、対象、主体（大人）である。ここで対象はまた、シンボリックな機能をもち、第一の記号の役割も果たしている。事実、子どもの対象への運動や操作は、生命的な欲求を満たすという目標を追求しているときでさえ、大人にとっては同時に、援助したり介入したり参加したりするための記号でもある。(…) 言いかえれば、ここでは、真のコミュニケーション、記号を通してのコミュニケーションが、大人と子どものあいだで生じている。対象への行為が、対象をめぐる対象として築かれ、記号コミュニケーションが、同一の対象をめぐる記号として築かれる。コミュニケーションと対象への行為は、ここでは完全に一致し、ただ人工的のみ分離されるのである。(…) (Radzikhovskii, 1984, p. 44)

右で定義した単位は、発生的にみて（個体発生の）比較的早い時期のものとして、また、人間活動の基本的・内的な記号構造を決定するものとして、そしてまた、個人の活動の普遍的な単位および要素として考えられるべきである。(Radzikhovskii, 1984, p. 49)

一見したところでは、ラジホフスキーはたんに、第二の間主観性についてのトレヴァーセンのモデル(図2・2)で例証されている、新ミード派の活動概念を採用しているにすぎないようにみえる。しかしながら、「第一の共同行為」の発生に関するラジホフスキーの説明は、ミードやトレヴァーセンの説明とは本質的に異なっている。ラジホフスキーにとつて、第一の共同行為における記号の使用は、非意識的であり、対象への行為に完全に融合している。ミードにとつて、この種の記号使用は、人間固有の段階である意識的な「有意味の身振り」に先行するものである。また、トレヴァーセンの詳細なデータによれば、9ヶ月までは、乳幼児の身振りと対象行為は分離しており、両者が融合することはないとされる。両者の結合(合併ではない)は、子どもの自己意識における新しいレベルを示す、発達のな達成である。

実際、これとまったく同じ原理が、1971年にエリコニンによつて定式化されている(El'konin, 1977)。心理学における支配的な思考形態では、発達というものを、互いに結びつかない二つの領域——欲求・動機領域と認知・道具的な領域——に分けていると、エリコニンは指摘した。前者は「人々の世界」を表し、後者は「モノの世界」を表している。この二分法的な思考形態は、決してたんなる主観的妄想ではない。それは、意識してはいないにせよかなり正確に、階級社会の歴史的な分野を反映している。つまり、主として労働の操作的・技術的側面の遂行者としてある子どもたちを育成し、一方で、別の子どもたちを、その活動の目標や動機を生み出す人間として教育する、というものである(El'konin, 1977, p. 552)。

モノを物理的な対象として、他者をランダムな個人として見なすなら、子どもは、基本的に独立した二本の平行線に沿うようなかたちで、これら「二つの世界」に適応していくことになるように思われる。(El'konin, 1977, p. 547)

人格の形成を「社会における子ども」というシステムのなかで見ると、「子ども・モノ」というシステムにおけるリンクと、「子ども・個々の大人」というシステムにおけるリンクが、いかに根本的に異なる性格をもつかがわかるだろう。二つの独立したシステムからひとつの統一したシステムに変化するのである。その結果、それぞれのシステムの内容は本質的な変化をこうむる。今や「子ども・モノ」のシステムを研究すれば、物理的・空間的な特性をもったモノが、子どもにとっては社会的対象として現れることがわかるだろう。そこにおいて支配的なのは、これらのモノを扱う行為の社会的に進化した様式である。(El'konin, 1977, p. 549)

「第一の共同行為」についてのラジホフスキーの記述は、進化的な観点からみれば、人類に先行する動物の活動の実際の構造に対応しているように思われる。ラジホフスキーがモノの生産やモノとしての道具（および、それらと記号や他の「心理的ツール」との関係）の役割をほとんどまったく無視していることをみれば、この結論は支持されよう。

このように、結果はいくぶん後退的なものであったが、ラジホフスキーの試みは、ヴィゴツキー・レオンチェフの伝統のなかでは解決されなかつた問題の存在を明らかにした。

ウィゴツキーからレオンチェフへとこの第三の思潮は、技術的ツールおよび心理的ツールと他の人間とによって媒介された、モノの生産にもとづく活動の概念をもたらした。私が継承し発展させようとしているのは、この思潮である。次の課題は、発生的分析を通して、人間の活動の構造のモデルを導き出すことである。

5 活動の進化

活動の動物における形態としての生物学適応の一般的様式は、次のように描けるだろう。

このモデルに具体化されている中心的考えは、動物の活動や種の発達にみられる直接的な集団的性質である (Jensen, 1981 参照)。種は、成員と自然とのあいだの矛盾を解決するための組織的な形成体、つまり「生存の方法論」と見なせる。この形成体においては、原型と手続きとが、相補的なかたちで互いを定義しあう。

動物的活動が適応的性質をもつということは、自然からの要求や圧力に受動的におとなしく従うことを意味するものではない。ルウォンティン (Lewontin, 1982, pp. 160-161) が示しているように、有機体と環境は常に、さまざまなかたで相互に浸透しあうのである。

有機体と環境とのあいだにみられるこうしたさまざまな形式の弁証法的相互作用で重要なものは、進化

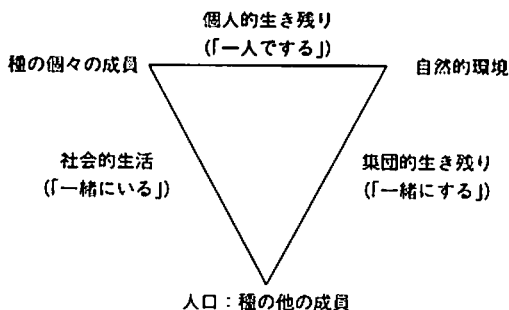


図 2・4 活動の動物的形態の一般的構造

を、前もって与えられた環境上の「問題」の、種による「解決」と見なすことはできない、ということである。なぜなら、問題とその解決をともに決定しているのは、種自身の生活活動だからである。(…)有機体は、それぞれの個体の一生のうちで、また、種としての進化の過程において、環境へ適応するのではない。有機体は、環境を構成するのである。(Lewontin, 1982, pp. 162-163)

動物の進化の高次のレベルでは、図 2・4 に描かれた三角形の三辺のそれぞれに裂け目 (rupture) が認められる。いちばん上の辺にある「個体の生存」では、新たに生まれたツールの使用によって裂け目が生まれる。このことは、類人猿がもっとも鮮やかに示している (Schurig, 1976 参照)。左辺の「社会的生活」では、適応することとつがうことが交差するところに生じる集団的伝統、儀式、ルールによって裂け目が生まれる。右辺の「集団的生存」では、産み、育て、つがうという実践によって影響を受けた分業によって裂け目が生まれ、最初は性的分業として現れる。

これらの裂け目は、「たんに線形的な高次の発達過程として」理解することはできず、「むしろ、多様な進化論的要因の影響の下で、互いに競合する複数の発達が出現してくる過程として」理解できる (Keller, 1981, p. 150)。類人猿は、ツールによる裂け目の典型例である。また、イルカは、「多くの個体をひとつの全体としてはたらくシステムに組織する並外れた能力」(Keller, 1981, p. 151)を用いて、「一緒にする」と「一緒にいる」における裂け目を生じさせた典型といえよう。この「裂け目」の段階は動物と人間とのあいだの移行域であり、実のところまだあまりよくわかっていない。いちおうは、図2・5のように描けるだろう。

類人猿は、体系的にツールを作り保存することはない。ツール制作とツール使用は、類人猿の活動の支配的な形態というよりは、まだ例外的な形態なのである。イルカの活動については、アナロジーとして評価できる。

動物の心理から人間の意識への移行が、イルカの場合完全な形では行われていない(…)という事は、次のような事情から説明できる。つまり、類人猿の系統発生において見られ、また、人間の生産的(つまり、ツールに媒介された)活動の動物レベルでの前触れと見なしうる、操作を完成させるために外なる補助物を用いたり準備したりすることに相当する、能動的で道具に媒介された物質的な現実の適用がイルカの社会的行動には見あたらぬ、ということである。イルカの社会的生活がどんなに複雑なものであったとしても、そのなかで生じる関係が「生産活動」によって調整されることはないし、また、それによって決定されることも、それに依存することもないのである。(Keller, 1981, p. 153)

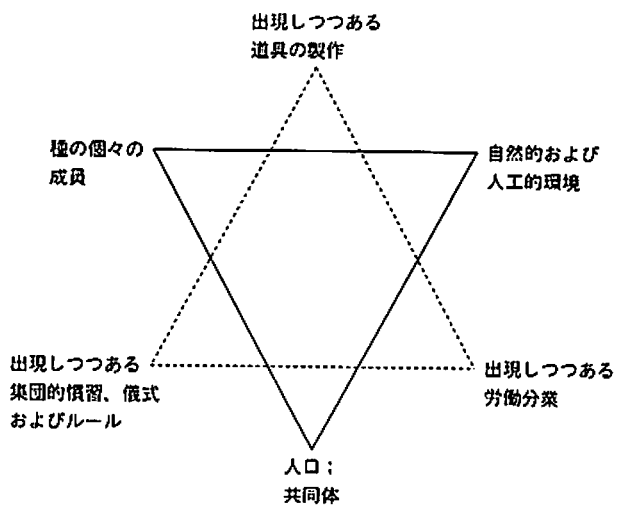


図 2・5 動物から人間への移行期における活動構造

人間の文化的進化へ——人間に固有の活動形態へ——躍進するには、かつては個々、別々、の裂け目、あるいは媒介として現れてきたものが、統合された決定因になることが必要である。同時に、生態的・自然的であったものが、経済的・歴史的になることである。

意図的な行為は、人間以外の霊長類においても協働的であり社会的に制御されることが多いので、協働の存在しない対象使用のプログラムからよりは、すでに協働的である社会的相互作用から協働を導き出す方が理にかなっている。したがって、人間の技術の進化の理論は、人間と類人猿のあいだのツール使用能力の差異（それは重要ではあるのだが）にあまり強調をおくべきではない。それよりは、新しく現れたツール使用能力が、どのようにして意図的な社会的行為の領域へと統合されていったのかを問うべきである。（Reynolds, 1982, p. 382; Reynolds, 1981も参照）

リチャード・リーキーとロジャー・レヴィンは、この原初的な統合について見事なスケッチを描いている。人間とは、後で食べるために食べ物を集める唯一の霊長類だと彼らは指摘する。初期の人間は、混合経済 (mixed economy) のなかで、植物の採集や死肉あさり、狩猟によってこれを行った。しかしながら、「狩猟や採集そのものではなく、共有 (sharing)こそが、私たちを人間にしたのである」(Leakey & Lewin, 1983, p. 120)。

(…) 原始的な容器——最初の運搬袋——の発明は、初期人類の生存の生態を食物分配経済へと変えた。

運搬袋の前後に生まれたと考えられる穴堀棒も重要ではあるが、それは容器のような社会的影響はもたなかった。穴堀棒は、生活を容易にしたではあろうが、新しい生活様式の先触れとはならなかったのである。(Leakey & Lewin, 1983, p. 127)

統合のもうひとつのポイントは、集団的に組織され、安定した居住地で集行的に行われるようになった、ツール制作の出現であった (Leakey & Lewin, 1983, p. 83, p. 128)。

リーキーとレヴィンの原始人類学の見解は、ピーター・ルービンによる哲学的な指摘と一致している。

あらゆる社会的システムは、全体の生産物を必要な生産物と余剰の生産物とに分けるといふ分析的な問題に直面する。そして、これらの生産物の分配 (distribution) のためにつくりだされた規則が、それぞれのシステムに「公平」の規準を与える。必要労働を超えた労働の余剰物の存在は、あらゆる労働システムのなかにア・プリオリに存在しており、したがって、社会性は、個人性とは対照的に、まさにこの余剰生産物のなかに認めることができる。(…) 社会性を構成するのは、こうした余剰をめぐる争いである。(…) こうして、社会的メカニズム、とりわけ政治的支配のメカニズムは、(…) 余剰生産物をもたすための発生的な前提条件としてではなく、その量的拡大のための手段として機能するのである。

(Ruben, 1981, pp. 128-129)

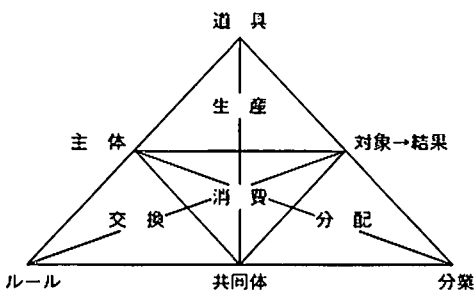


図2・6 人間の活動の構造

こうして、活動の全体構造は再構成される(図2・6参照)。図2・6に描かれたモデルは、図2・5に描かれた暫定的モデルの論理的延長である。適応的活動であつたものは消費へ交換され、人間活動の三つの支配的側面——生産、分配、交換(あるいはコミュニケーション)に従属することになる。

このモデルは、活動の三角形構造のなかの多数の関係の分析可能性を示している。しかしながら、本質的課題は常に、個々の結合だけを見るのではなく、システム全体を把握することである。ここで、「経済学要綱」の序論におけるカール・マルクスの分析が重要になる。

生産は、所与の欲求に対応する対象をつくりだす。分配は、これらの対象を社会的な法則にしたがつて配分する。交換は、すでに配分されたものを、個々の欲求に応じて再配分する。そして最後に消費であるが、生産物がこの社会的運動の外に出て、直接に個々の欲求の対象となり、その奉仕者となって、消費されることによってこの欲求を満足させる。こうして生産は出発点として、消費は終点として、分配と交換は媒介項として現

れる(…)。(Marx, 1973, p. 89)

マルクスは続けて、ものごとがこれほど単純ではないことを示している。生産は、常に個人の能力の消費でもあり、生産の手段でもある。それと対応して、消費は、人間自身の生産でもあるといえる。さらに、分配は、たんに生産の帰結として現れるだけでなく、生産の道具を分配したり、さまざまな種類の生産を行うときに成員を分配したりするという形で、生産の内在的な前提条件としても現れるだろう。最後に、交換も、生産者間でのコミュニケーションや、相互作用や、未完成の生産物の交換といったかたちで、生産の内部で見られる。

このことは、図2・6の四つの小三角形のあいだの境界が曖昧になり、ついには消えてなくなるということを意味するのだろうか。

私たちが到達した結論は、生産、分配、交換、消費が同一のものであるということではなく、それらはずべてひとつの総体の異なるメンバーであり、ひとつの統一体の内部で区別されるということである。生産は、その反定立的定義によって自己に対して支配的であるとともに、また他の諸契機に対しても支配的である。過程は、たえず新たに生産からはじまる。交換と消費とが支配的でありえないことは、おのずから明らかである。生産物の分配としての分配についても同様である。しかし生産要素の分配は、それ自身生産のひとつの契機である。したがって一定の生産は、一定の消費、分配、交換を規定し、またこれらのさまざまな契機相互間の関係を規定する。もちろん生産もまた、その不均衡な形態において、